第 8 次仮家塚遺跡発掘調査概報
－ 2021 年度の調査報告－

仮家塚遺跡発掘調査団
白石哲也・杉山祐一・小倉淳一・根本岳史
植田雄己・小林　嵩・佐藤兼理

1. 調査の目的

(1)　本研究の目的

千葉県南房総市に所在する仮家塚遺跡は、過去に行われた発掘調査によって、南関東で本格的な水稲農耕が開始されて間もない、弥生時代中期後葉の最古段階（宮ノ台式土器の初期段階）に属する方形周溝墓群が検出された遺跡である。この時期の南関東は、遺跡数が極めて限られており、仮家塚遺跡の調査成果は大きな注目を集めた。

現在、南関東では、弥生時代中期中葉に小田原市中里遺跡などの灌漑稲作を行う農耕集落が出現し、中期後葉の宮ノ台式期に、横浜市大塚・歳勝土遺跡に代表される環濠集落が各地で現れ、本格的な農耕社会が拡大する、と理解されている。つまり、この「本格的な農耕社会」が成立する宮ノ台式期は南関東地方における社会の複雑化過程にとって、重要なターニングポイントになったと考えられる。ところが、仮家塚遺跡が営まれた宮ノ台式成立期は、考古学的証拠が希薄なため、中里式期から宮ノ台式期への移行を捉える上で、大きなブラックボックスとなっている。

仮家塚遺跡の所在する地域は、地形的に集落範囲がある程度限定できることに加え、これまで大きな開発もなく、当時の遺構遺物が残っている可能性も高い。また、近年では仮家塚遺跡の南方に所在する館山市宇戸台遺跡や萱野遺跡など、仮家塚遺跡に続いて展開する弥生時代中期から後期の遺跡が調査・報告され、安房平野における農耕社会の発達過程を明らかにする条件が整いつつある。こうした理由から、本調査団では仮家塚遺跡と同時期の集落を復元する手掛かりを得ることを目的に、2021 年度より調査を開始した。本報告は、2021 年度の調査概報という位置づけとして、報告を行うものである。なお、2021 年度調査概要と体制は、第 1 表・第 2 表の通りである。

第 1 表　2021 年度調査概要

調査地点	千葉県南房総市府中字仮家塚 201 番
調査面積	調査対象面積：639 ㎡、掘削面積：75 ㎡
調査期間	2022 年 3 月 11 日～ 3 月 14 日

第 2 表　調査体制（所属は、2021 年 3 月現在）

氏　名	所　　属
白石　哲也	山形大学学士課程基盤教育機構
杉山　祐一	印西市企画政策課
根本　岳史	公益財団法人印旛郡市文化財センター
植田　雄己	埼玉県毛呂山町教育委員会
佐藤　兼理	明治大学大学院博士後期課程
小林　嵩	公益財団法人千葉市教育振興財団
小倉　淳一	法政大学文学部

(2)　調査地点と周辺の歴史

仮家塚遺跡は、南房総市府中（旧安房郡三芳村府中）に所在する弥生時代中期から平安時代にかけての遺跡である。遺跡は、房総丘陵の愛宕山付近に源流をもつ平久里川下流の左岸に形成された標高 17 ～ 21m ほどの河岸段丘上に立地し、東には圃場整備された水田地帯が広がっている（第 1 図）。

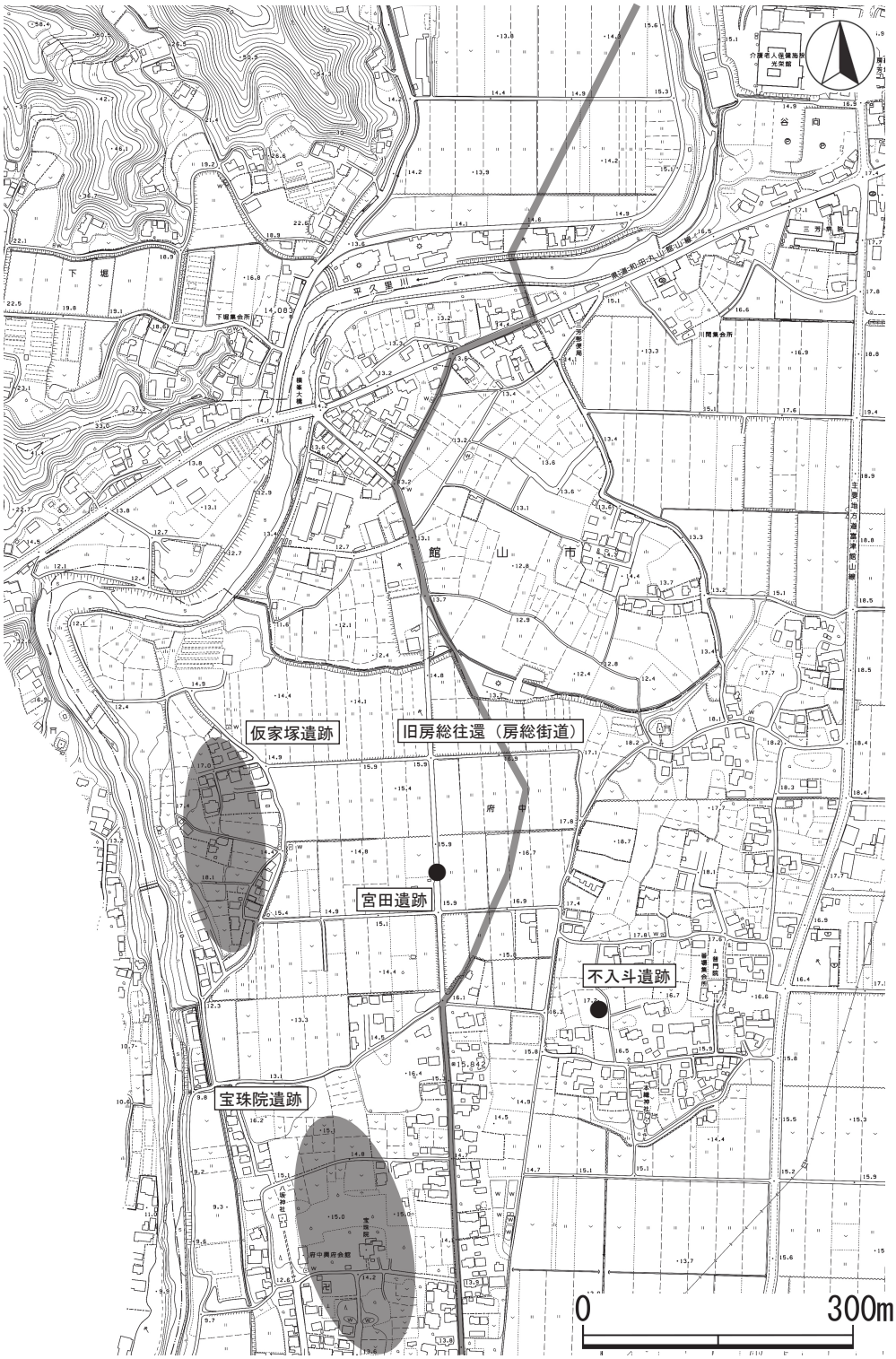
弥生時代の遺構が検出された段丘は、水田面より 3m ほど高くなっており、水田面から望むと小高い微高地となっており、平久里川に分断され独立丘陵のようにも見える形状から「仮家塚」の地名が付されたものとみられる。なお、この水田面からは古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての遺物散布地（宮田遺跡）が確認されている。

微高地上は概ね平坦であるが、方形周溝墓が検出された第 6 ・7 次調査地点を頂点として、南北および東にはゆるやかに傾斜する。

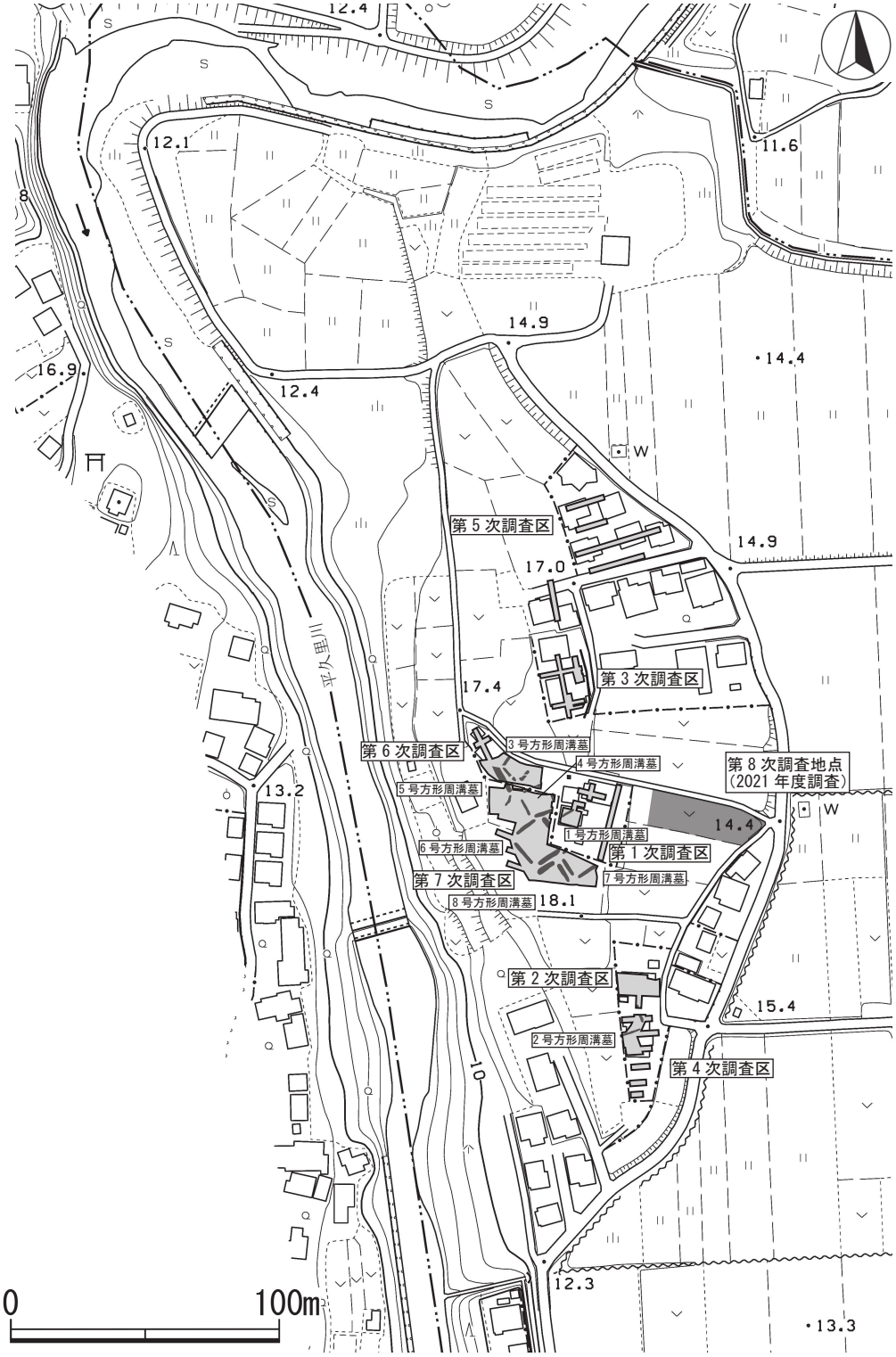
遺跡の現況は、本調査地点の周辺に住宅が建つものの、明治時代以降の迅速図や地形図、空撮写真を確認する限り、昭和 50 年代後半まで土地利用が畑の開墾にかぎられていたことから、地中の遺構は大きなダメージを受けずに今日まで保存されてきたものとみられる。

仮家塚の地名については、中近世に記された文献には明確な記述はないものの、大正 15 年に安房郡教育委員会が編さんした『千葉縣安房郡誌』の国府村の条に、「(安房国が) 養老の制に復し、平郡に府を置くと。蓋し其の置府の位置は本村府中にして、假家塚と稱する一岡陵はその遺跡なりと傳へらる。然れども文献に徴すべきものなく、其の位置果たして假家塚なりしや否や知ること能わず。(因みに假家塚は往昔安房九社の神輿是に渡御して假宮を造りし所とも云う)」（千葉県安房郡教育委員会編 1921）との記述があり、安房国府の所在地かは不明なものの安房国の重要な地であったという伝承が地域に伝わっていたことがうかがえる。

安房国府の所在については、水田面を挟んで南に広がる微高地もその推定地となっている。ただし、同地に所在する宝珠院遺跡からは、これまで弥生時代後期の住居跡と円墳 3



第１図　仮家塚遺跡の位置と周辺遺跡



第 2 図　仮家塚遺跡の調査地点

基が検出されているものの、国府に関する遺構・遺物は発見されていない。

また、応永年間に開山した宝珠院の東には、中世後半から近世にかけて整備されたとみられる房総街道（房総往還）が通っており、北に広がる水田地帯を北上していた。この房総街道は、明治16年（1883）測図の迅速測図や明治36年（1903）測図の地形図には「主要なる府県道」として記されており、この地域の主要道路であった。しかし、昭和40年代後半に行われた圃場整備により、水田区画の整備とともに道路の付け替えが行われ、水田内を通っていた房総街道は滅失している。このことは、水田地の土地利用の様相は変わらないものの、圃場整備による土地改変が大規模であったことを物語る。

仮家塚遺跡は、微高地と河川、直下に広がる低地という農耕集落を形成するうえでは理想的な立地であり、遺跡自体も後世の影響が少ないことから、方形周溝墓群の広がりや隣接した集落域の発見などが期待される。

しかし、生産域と目される低地部分に関しては、水田区画の整備や道路の付け替えといった大きな土地改変を受けており、今後の調査においても注意を要する点である。

(3)　仮家塚遺跡のこれまでの調査経過

仮家塚遺跡では、過去７次にわたり個人住宅建設に伴う発掘調査が実施された（第２図：第１～５次：中野・新井1991、第６・７次：大渕・小川1994）。第１次調査は、1986年に台地中央部に設定されたトレンチ内で実施され、頸部を欠く無文壺１点を伴う弥生時代中期の方形周溝墓１基（ＳＺ01の一部）と近世溝２条が調査された。1989年には、第２次・第３次調査が並行して行われ、台地南側で実施された第２次調査では古墳時代前期の竪穴２棟と弥生時代中期の方形周溝墓１基（ＳＺ02の一部）が調査された。

第１次調査区の北西側で実施された第３次調査では、弥生時代中期の土坑墓とされる土坑１基と、時期不明の土坑１基及び溝１条が調査された。1991年には、第４次・第５次調査が並行して行われた。第２次調査区の南側に隣接する台地南端部で実施された第４次調査では、調査区北側から完形の無文壺１点を伴う弥生時代中期の方形周溝墓１基（ＳＺ02の一部）と、弥生時代後期の竪穴１棟、古墳時代後期の溝１条が調査された。遺構の広がりを確認するため、第３次調査の北側に５本のトレンチが設定された第５次調査では、中近世の溝１条と時期不明のピット１基が調査された。

1992年には、第１次調査区の西側隣接地で第６次調査が、1993年には第６次調査区の南側、第１次調査区の西側から南側の隣接地で第７次調査が実施された。第６次調査では、弥生時代中期の方形周溝墓３基（ＳＺ03、ＳＺ04、ＳＺ05のそれぞれ一部）と周溝状遺構（ＳＸ01）、平安時代の溝１条が調査された。第７次調査では、弥生時代中期の方形周溝墓５基（ＳＺ04、ＳＺ05、ＳＺ06、ＳＺ07、ＳＺ08のそれぞれ一部）と、方形周溝墓の可能性もある溝２条（ＳＤ07、ＳＤ08）、平安時代の蔵骨器１基が調査された。第７次調査

では、ＳＺ 05 とＳＺ 08 を除くすべての方形周溝墓から大型のものを含む壺形土器が出土し、特にＳＺ 04 とＳＺ 06 からは複数の土器が出土した。その他、ＳＺ 03 からは土製品が 2 点出土している。

本遺跡でこれまで検出された 8 基の方形周溝墓はすべて弥生時代中期の特徴である四隅切れの平面プランを呈し、溝を共有するものはない。また、弥生時代中期の土器はすべて宮ノ台式土器であり、特に第 7 次調査で出土した一群は房総地域の宮ノ台式最古段階に位置付けられる資料と評価される。

2.　調査の概要

(1)　遺構

今回の調査では、2 × 25 ｍのトレンチを 1 ヶ所（1 トレンチ）と、2 × 4 ｍのトレンチを 2 ヶ所（2・3 トレンチ）設定し掘削をおこなった。その結果、1 トレンチ西側で平面形から弥生後期以降と考えられる住居跡が 1 軒検出された（第 3 図）。また、その住居跡と重複し住居跡よりも新しい中・近世と考えられる溝状遺構が 1 条検出され、東側に続いている。中央付近では古代以降と考えられる土坑が 1 基検出された。2 トレンチでは、弥生中期の可能性がある住居跡が 1 軒、中・近世と考えられる溝状遺構が 1 条検出され、3 トレンチでは中・近世以降と考えられる溝状遺構が 2 条検出された。

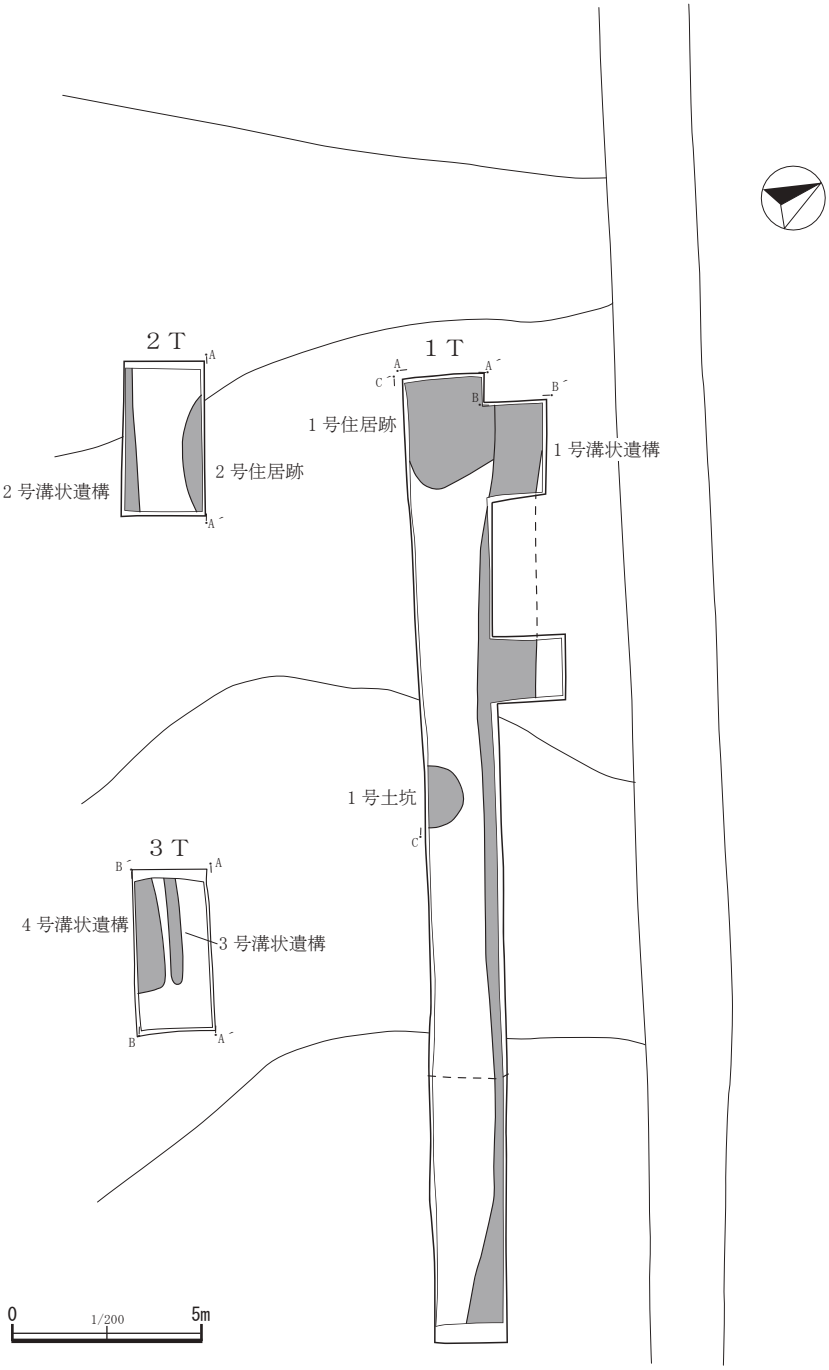
土層についてはⅠ～Ⅲ層が自然堆積層である（第 4 図）。Ⅰ層は現在の耕作土、Ⅱａ層とⅡｂ層は色調は近いが、Ⅲ層由来と考えられる粘質土ブロックの多寡で分層した。Ⅲ層は粘質が強く、乾くとブロック状に崩れる。Ⅲ層以下は礫が多量に混入する層が続く。1 トレンチで検出された住居跡はⅡｂ層中から掘り込まれていると考えられる。溝状遺構及び土坑はⅡｂ層の堆積よりも新しいと判断され、Ⅱａ層中から掘り込まれていると考えられる。2 トレンチで検出された住居跡はⅡｂ層を掘り込んで構築されている。

(2)　遺物

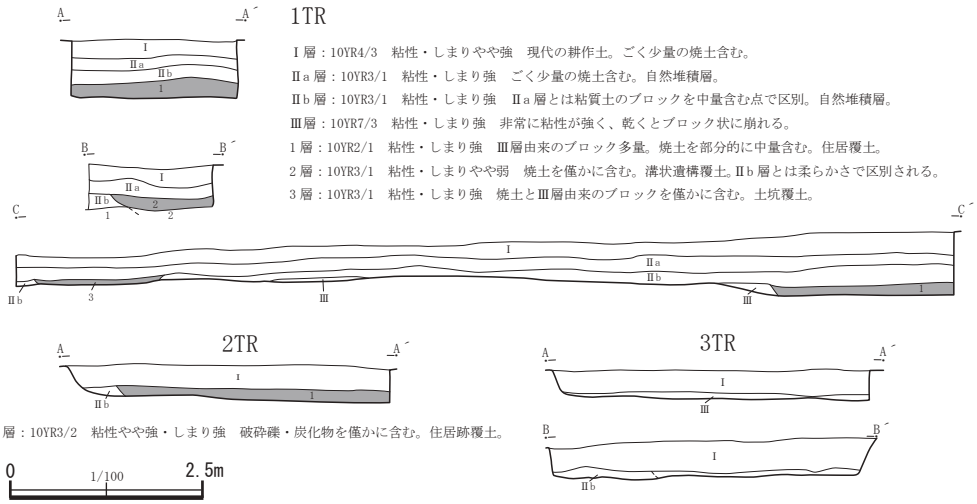
今回の調査で検出された遺物は、1 トレンチ西側の 1 号住居跡の覆土より出土した土器片 2 点と、２トレンチの２号住居跡の覆土より出土した土器片が数点、１トレンチの包含層より出土した数点である。そのほとんどがごく小さな土器片であり、図化に耐えうるものは 1 トレンチの包含層より出土した第 5 図の土器である。

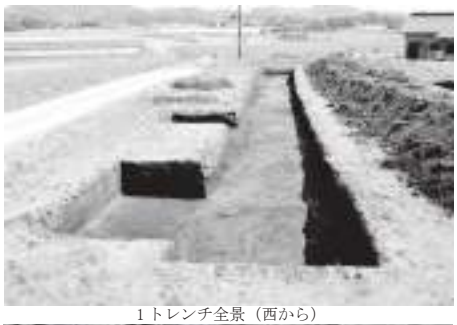
１トレンチ西側の１号住居跡覆土より数点の土器片が出土している。赤褐色で胎土に砂粒を多く含んでいる点などから弥生時代後期のものと考えられる。このほかにも数点の土器片が出土しているが、時期の判定は難しい。

２トレンチの２号住居覆土からは弥生時代と考えられる土器片が数点出土しているものの、こちらも図化することが難しく、報告を割愛する。



第３図　2021年度調査遺構配置図



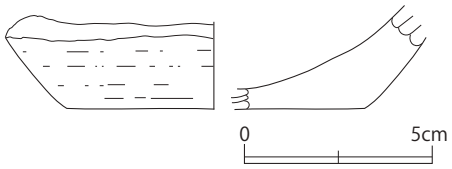

1 トレンチ全景（西から）

1 号住居跡・1 号溝状遺構（北東から）

1 号住居跡土層断面（北東から）

1 号土坑（北東から）

第 4 図　土層断面図・遺構写真



第５図　出土遺物（S=1/2）

１トレンチの包含層からは奈良・平安期の土器片が出土している。図５は壺の底部と考えられる。褐色で胎土の粒子が細かい。内面は磨かれており、底部の最深部の厚さ５㎜程度と薄い。このほかにも数点の土器片があるものの図化することが難しいため報告を割愛させていただく。

3.　2021 年度の調査まとめ

今回の第８次（2021 年度）調査では、弥生時代に関する遺構としては１トレンチ西側で平面形から弥生後期以降と考えられる住居跡が１軒検出され、２トレンチから弥生中期の可能性がある住居跡が１軒検出された。これにより、方形周溝墓は段丘東側には広がらず、集落が所在する可能性が見えてきた。次年度の調査では、２トレンチの弥生中期の可能性がある住居跡のプラン確定と時期確認を行っていく予定である。まずは、集落と墓域の範囲を確定させていく。

謝辞

本調査を行うにあたり、下記の機関・個人にご協力頂きました。記して感謝申し上げます。

千葉県教育委員会、南房総市教育委員会、岡山亮子、酒匂喜洋、関口光男、谷口肇、野中裕介（五十音順、敬称略）

【引用・参考文献】

大渕淳志・小川和博　1994『安房仮家塚－房総半島南端弥生時代中期の方形周溝墓の調査』千葉県三芳村教育委員会

総南文化財センター　2000『年報 No.11』

千葉縣安房郡教育會編　1921「第十七章　町村誌」『千葉縣安房郡誌』

中野修秀・新井和之　1991『千葉県安房郡三芳村　仮家塚遺跡－個人住宅建設に伴なう発掘調査報告書－』千葉県三芳村教育委員会